

# 日本気象学会昭和36年度 総会議事録

日時 昭和36年度5月30日

場所 北海道大学クラーク会館

出席通常会員 111名 委任状総数 125名

書面参加会員 166名 以上総数 291名

5月20日現在で通常会員は1607名で、定款第36条による出席会員総数322名、並びに委任状および書面によらない出席会員数65名の条件を満して総会は成立。

次に議長は出席会員の互選によるものであるが、例により中谷大会委員長を推すことを一同に計り、満場一致同氏と決定した。

そこで中谷宇吉郎氏が議長席につき、総会が行なわれたが、その内容は概ね次の通りである。

## (1) 正野理事長の挨拶

美しい札幌の地において、台風の観迎までうけて本総会を開くことが出来たのは永く忘れられない記憶として残ることと思います。

最近新聞紙上である外国人が、「日本が世界歴史の流れを変えうる世界の大国として再び登場した。ほかの国は芸術文化の面での新しい傾向や、経済社会活動上の新しい工夫を日本に求めている。国土が狭く天然資源に乏しいにもかかわらず、日本国民は東洋で最高水準に達し知識や文化の上でもどの国にも負けないほどの力を発揮した」と述べています。

これは多少のお上手があるかも知れないが、必ずしも不当なものではないと思います。

わが気象学会についても同様のことが云えると思います。内側から見ると、研究費、組織などの点で必ずしも満足すべき状態ではないが、外から見たとき、日本の気象界の世界的気象界に於ける重みが次第に増してきていることを示す例を数多くあげることが出来ます。これは十年前と比べると、全く今昔の感に堪えないのであります。とは云っても内側からみると、これで充分という段階ではなく、一層の努力が必要であって、この際気象学会の果す役割は極めて重要なものであります。

天気その他によって既に御承知の通り、昨年11月前半に行なわれた数値予報国際シンポジウムは9ヶ国から46名の一流研究者の参加を得て、成功したものと考えていますが、このことはわが気象学会としては劃期的なことでありました、なお、シンポジウムの論文集は既に60篇

の原稿が集まり、編集中心であります、印刷頁にして約600頁の大部のものになる予定です。これが出来ると、一段とわが気象学会の声価が高まるものと考えています。

国際会議についてはWMO関係の外に、雲物理、オゾン、海洋と大気相互作用などのシンポジウムに、本年は4名位参加の予定であります。

このように国際的な活動が行なわれていますが、隣国中共との正常な交際が行なわれていないのは残念であります。

この問題は国際的な政治や外交問題と関係し、気象学会としては力の及ばない点が多いのですが、われわれの出来る範囲で交際の正常化を推進することに努めたいと考えています。

昨年の総会で決議されました洋上における高層観測の実現方につきさっそく関係方面に働きかけ、現在なお努力を続けております。またフランス国によるサワラにおける原爆実験の抗議の件は、前理事会からの引継ぎ事項でありました。いろいろと研究した結果、過日ドゴール大統領宛の抗議文の発送と、同写しを世界の主な学会または組織の長宛に送りました。

以上対外活動であります、学会としては対内活動がこれに劣らず主要なものであります。

気象学会は申すまでもなく、会員の会費によって運営されているものであり、皆様の会であります。従って学会の運営をおあつかりしている理事会としては、会員の便宜または利益については一刻も忘れられないものと考えています。

かねてから出版されている研究ノートは、編集委員の努力により皆様の便宜を供しているものと考えていますが、本年初めより発行された Selected Meteorological Papers も好評のうちに継続しています。今後も皆様の便宜および利益を与えるプランがあれば、どしどし実施するつもりですが、皆様の方からもよい企劃があればお教願いたいたいものであります。

学会誌の一つである天気は皆様の会誌として、大いに活用して頂きたいと考えます。

気象集誌は主として外国語で書かれ、内容も学問的なもので、現場の会員に直ちに役に立つという論文ばかりではありません。それで稀には集誌不要論も聞くのでありますが、学会の活動としては極めて大切なものであります。集誌に発表された論文はやがては消化され、気象技術に対して滋養分を供給する源であり、これがなくなると、気象技術はやがては栄養不良に陥るものと信じています。また対外的には日本の気象界の水準を示すものでありますので、一層充実した権威あるものとするように努力したいと考えています。近頃集誌への投稿が少ないのですが、皆様から多数投稿されるよう、また集誌に対して御理解ある協力を得たいのであります。

さて以上のように対外および対内的活動を企劃し、実施を担当しているのは、理事会とこれに委託された各種委員会です。従って理事会は気象学会の活動について頭脳の役割を果しているのでありますから、理事会は絶えず新鮮であり、活動的でなければならないと同時に正常な判断力を持たなければなりません。

そのためには活動的な新進気鋭の士と経験豊かな老練の士が適当に選ばれるのがよいと考えます。また企劃運営がマンネリズムに陥らないように、また総ての会員が自分の学会であるという感覚を強めるためには、成るべく多くの人々が交代で理事になり、学会の運営を担当していただくのが適当であると考えます。

理事の中でも会計理事の人事が困難なく行なわれるためには、継続的事務局の設置が必要なことであり、このためには財源の確保が先ずわれわれが解決すべきことと考えています。

来年は創立80周年に当りますので、実質的な記念事業をしたいと考えています。良い案がありましたらお教え願います。

最後に本総会ならびに大会を開催することが出来ましたのは、北海道大学、札幌管区気象台ならびに北海道支部の皆様の方ならぬ骨折りによるもので、厚く御礼申し上げます。

以上は殆んど当面の事務的問題に限って述べるのですが、日本の気象界の発展には(1)研究組織(2)研究員の確保充実(3)今後採り上げるべきテーマその他種々の問題があります。これらにつきましては皆様と協力して、漸次解決して行きたいと考えております。

## (2) 学会賞授賞式

1961年7月

駒林誠氏および笠原彰氏に本年度学会賞が満場拍手のうちに授賞された。(内容については天気第8巻第4号参照)

### (3) 昭和35年度事業経過報告 淵 理事

現在会員数は1607名で昨年より10名増加で、この外30名長期会費未納者があり目下整理中である。昨年秋開かれた数値予報国際シンポジウムについては正野理事長の挨拶に譲る。国際学術交渉委員会は昨年9月17日発足し、昨年暮には約1カ月神山理事が訪中したが詳細は同氏の視察報告に譲る。気象学用語の最後決定については永い間停滞していたが最近やっと文部省でまとまり、本年度中には印刷刊行されることになった。

### (4) 数値予報国際シンポジウム経過報告

(5) 日本学術会議に関する報告 島山 理事  
日本学術会議の最近の活動について説明した。

### (6) 中国視察報告 神山 理事

昨年末、学会のみなさんのご推せんによりまして、日中友好協会の学術代表団の一員として加わり、中国科学院の招待を受けて、中国各地を訪問いたしました。

その際、たくさんの皆さんから物心両面のご援助を戴いたことを、この壇上から厚くお礼申し上げます。

訪中経過報告についてはおくりしてある天気掲載の「中国の気象事業のあり方」の別刷にも書いてあるので詳しいことはそちらをごらん願いたいと思います。

日本気象学会から中国気象学会へのメッセージについて話合ったことは私に果せられた大きな任務の一つであったのですが、中国気象学会では実によく討論していたようです。それについては、すでに正式に中国側からの手紙が来ており、「天気」で発表されておりますが、要するにわれわれ日本の気象学者が交流をのぞんでいることはよく理解しているし、中国の気象学者もそれをのぞんでいる。しかし、現実にこの両者の交流をはばんでいるものが、日本の政府にある。これは、日本の気象学者の責任ではないし、またもちろん中国気象学者の責任でない。このような状態では文献・人事の交流が円滑にいかないことはお互いに不便をしのばざるを得ない。しかし、具体的にお互いに交流できるような条件を確得して行こうという意味のことを強調されました。

わたくし達学術代表団は社会科学から自然科学にわたる総合的な団構成であったので、各専門分野での十分な接触はできませんでしたが、中国科学院、北京大学、南京大学、気象局などを訪れても、ひじょうな速度で科学技術の建設が行なわれていることをひしひしと感じま

した。

われわれの気象学の発展にとって日中両国の円滑な交流が行なわれることは是非必要なことで、今後皆様と共にその条件を確得していきたいと思ひます。

その意味で理事会提案の日中の気象交流についてご賛成戴ければ、大きく進展への途が一步開かれると思ひます。

(7) 昭和35年度決算報告 吉武 理事  
吉武理事から別紙(次頁)の内容の通り説明があり、満場一致可決された。

(8) 本年度事業計画並びに予算案審議 吉武 理事  
吉武理事から別紙内容(次頁)の通り説明があり、満場一致可決された。

(9) 提出議題審議

(1) 日中學術交流の促進に関する件

正野理事から提案理由の説明があり、この経費として旅費香港～東京間20万滞在費14万4千計35万、招待予定者として第一線で現在活躍している人と指導者の2名の予定。

(内海) 旅費その他経費は学会でたすのか

(理事) 案として考へていることは

1. 全額学会負担

2. 一部学会負担

3. 寄付による

(内海) 学会で出す場合どのようにして出すか

(理事) これから考へる

(吉武) 現在の学会の予算では出せないで、出すとすれば寄付など集めるようになる。

では一部だすならよいか、または全額出してよいか、決定したい

(神山) 予算的なことは次の問題で、差当ってはこのようなことの趣旨の当否を決定すればよい

それが決定すれば次の大会で予算書などを付けて出す採決 満場一致(書面参加で否とするもの2名)

(10) その他

(1) 来年度の当番部に関する件

内海理事から説明があり、来年度の当番は東北支部で引き受けてくれることとなった。

(2) 本年度秋の大会に関する件

島山理事から説明があり、本年度の秋委大会は東京管区気象台で引き受けてくれることとなった。

(242頁よりつづく)

10. 伊東良夫(芝浜中)：理科教育の中の気象の扱ひ方について(20分)

理科教育の中で気象がどのように扱われてきたかを明らかにし、現在は何のような段階にあるかを検討した。とくに昭和37年度からの文部省新指導要領ではどのような問題を呈起しているかを述べる。

11. 外ノ池善一(九段中)：中学校における教育について(20分)

12. 白岡久雄(気象庁予報)：科学技術振興のための科学技術教育(20分)

今日、科学技術の振興が広く社会の要請となって来ているが、これに対する主として、文部省、科学技術庁よりの意見で大学教育の理科系学生の増加と教育要目変更が示されている。上記を要約し教育の見地から若干の批判を試みたい。

13. 白岡久雄(気象庁予報)：国営移管の周辺(20分)

気象界内部からの要請と、戦争と気象との協力関係促進の機運を当時の史実より講述をして見る。

つづいて

シンポジウム：気象の国営移管について

昭和 35 年度 収支決算書

収 入		単位 (円)		支 出		単位 (円)	
会費	2,848,153			印刷編集費	2,965,845		
図書頒布	1,229,431			気象集誌		1,020,635	37/6~39/1
気象研究ノート		991,148		天象研究ノート		1,189,310	7/4~8/3
その他		238,283				755,900	11/2~12/1
雑収入	187,352			図書購入費	66,860		
文部省助成金	70,000			送通信費	310,511		
外国文献集	471,084			送通信費	284,187		
仮受	1,500			総務大会費		113,200	
前年度繰越金	508,117			役員大会費		101,917	
				例員会費		44,000	
				外委員会費		20,000	
				国際学管理員会費		5,070	
				学術交流会賞	24,000		
				支部交付金	104,000		
				支事職務員給与	604,768		
				印刷費		142,700	
				物品経手費		203,708	
				雑務手数料		179,150	
				図書整理費		43,732	
				外国文献関係費	309,500		
				会名簿印刷費	159,200		
				数值予報国際会議	200,000		
				仮払	1,500		
				次期繰越金	285,266		
合 計	5,315,637			合 計	5,315,637		
基本金	650,000	変化なし					
職員退職積立金	20,000						

第 1 卷, 第 2 卷

昭和 36 年度 収支予算書

収 入		単位 (円)		支 出		単位 (円)	
会費	2,736,600			印刷編集費	2,590,000		
通常 A 会 員		1,296,000	1,080円×1,200名	気象集誌		790,000	39/2~40/1
// B 会 員		795,600	2,040円× 390名	天象集誌		1,080,000	8/4~9/3
団 体 A 会 員		195,000	1,500円× 130件	気象研究ノート		720,000	12/2~13/1
// B 会 員		450,000	3,000円× 150件				
図書頒布	1,160,000			図書購入費	100,000		
気象研究ノート		920,000	800円× 900名	送通信費	400,000		
その他		240,000	1,000円× 200件	送通信費	245,000		
雑収入	100,000			総務大会費		60,000	
文部省助成金	70,000			役員大会費		80,000	
外国文献集	2,160,000		300円×600×12	例員会費		40,000	
前年度繰越金	285,266			外委員会費		20,000	
				国際学管理員会費		10,000	
				学術交流会賞	44,000		
				支部交付金	110,000		
				支事職務員給与	550,000		
				印刷費		150,000	
				物品経手費		200,000	
				雑務手数料		200,000	
				図書整理費	50,000		
				外国文献関係費	2,100,000		
				会名簿印刷費	100,000		
				数值予報国際会議	222,866		
合 計	6,511,866			合 計	6,511,866		
基本金	650,000	変化なし					
職員退職積立金	20,000						

3 卷~16 卷